

Contents

- 02 目次
プロローグ Vol. 6
- 04 特集 日本式の協力
だから、日本式! ~生活編~
- 06 「日本式教育」で、子どもたちが変わる!
エジプト
- 12 みんなで取り組むから楽しい! 「UNDOKAI」
マラウイ/セネガル
- 14 「技術」で暮らしを豊かに
ボリビア/スリランカ/カンボジア/マレーシア/ミャンマー
- 18 「心配り」が発展を生む
コスタリカ/神奈川県・横浜市
- 20 魚食文化を「養殖」で支える ミャンマー
- 21 「長寿」につながるリハビリ タイ
- 22 特別授業 ともに作り上げる日本式の協力
- 24 JICA海外協力隊がゆく Vol. 5
エクアドル
- 26 世界につながる教室③
子どもたちの目を世界にひらく
- 28 地球ギャラリー Vol. 127 南アフリカ共和国
写真・文●木下貴史 フォトグラファー
再起の現場を歩く
- 34 教えて! 外務省
知っておきたい国際協力⑦
- 36 JICAイベントカレンダー
- 38 読者の声、プレゼントほか
- 39 JICA PRESS
- 40 わたしが見つけたSDGs Vol. 7



エジプトで広がる「日本式教育」の動き。日々使う教室を自分たちで掃除するため、椅子をデスクにあげる児童。写真：光石達哉



信頼で世界をつなぐ
Leading the world with trust

彼女たちの未来を とともに紡ぐ関係に

プロローグ
Vol. 6

文・瀬戸久美子

その日本人女性は、小さな作業場のバックヤードから突然現れた。フィリピンのマニラ北東部にあるケソン市パヤタス地区。廃棄品で作った家が目立つその地域の、とある小さな刺繍センターを訪れたときのことだ。

「こんなところに、日本人?」

一瞬、テレビ番組のタイトルのような言葉が頭をよぎった。聞くと、彼女はNPO法人のスタッフだという。夫の転勤を機にフィリピンに渡り、以後10年以上ここで住民の生活向上のために活動をしているらしい。パヤタス地区は、2000年にダンプサイトと呼ばれる廃棄物処分場で崩落事故が起きたことでも知られる場所だ。一時期は専業・兼業合わせておよそ2000人が、ゴミのなかからリサイクルできる資源を拾って生計を立てていたとされる。ごみ山が閉鎖された今も、貧困にあえぐ世帯が少なくない。

そんなエリアにぼつりと設けられた刺繍センターでは、生活を少しでもよくしたいと願う女性たちがクロス・ステッチという刺繍の技法を使って小物製品を作っていた。目を引いたのが、そのデザイン性の高さだ。国民的デザート「ハロハロ」に、フィリピンに行けば誰もが目にする乗り合いタクシー「ジープニー」。日々の暮らしの中にある物や景色をモチーフにした小物たちが、「社会貢献になるから買って」ではなく、「いいものだから買って」とこちらに訴えかけてくる。

実はこれらの商品、ある地元の女性のセンスがベールになっていて、そのきっかけを生んだのが冒頭の日本人女性だ。昔はいろんな人が思い思いにデザインしていて、商品全体にまとまりがなかった。「せっかく時間をかけて作っているのに、もったいない」。そう思っていた矢先、パヤタス地区に住む女性のなか



イラスト●中村知史

に類いまれな絵心の持ち主がいると気づき、その人にデザインのお手伝いしてみた。結果、商品に統一感が出て、訴求力の向上につながったのだ。「閉じられた世界のなかにいると、自分の何が特別なのかを知るのには難しいし、知るきっかけもないのです」そう彼女は教えてくれた。

「よそ者」だからこそのわかる、その地域の人たちの潜在的な能力や魅力がある。日々のやり取りの中で、それらを引き出し、経済力や生活力、自信に変える。けつして押し付けることなく、状況に応じて現地の人とともに手を動かし、たがいの理解と共感を深めながらプロジェクトを進めていく。

それはとても地道な作業で、大きなインパクトを起すには時間がかかるだろう。それでも取り組みを重ね、信頼関係を築いた先に、未来の姿が浮かび上がってくる。ちょうど糸を交差させながら一針一針、図案を描いていくクロス・ステッチのように。

そして、途上国の人が自分たちの力で暮らしをよくしていけるよう、どこかでそっとバトンを渡す。以前はごみ拾いで生計を立てていたという女性は、そうした日本の地道な支援に触れる中で、諦めずに理想を描き続けることが大事だと気づいたという。そして今、彼女は地域住民が貧困の連鎖から抜け出せるようサポート役に回っている。「親が夢を持っていい」と知ったとき、子どもも夢を持てるようになる。そう実感できたからこそ、自分がみんなに伝えていくのだ、と。地域を、未来を、自分たちの手で変えていくために。

瀬戸久美子(せとくみこ)

東京都生まれ。早稲田大学第一文学部在籍中に、交換留学先の米国でジャーナリズムを学ぶ。卒業後、新聞社系列の出版社で記者、副編集長を務めたのち独立。現在は複数のプロジェクトに関わりながら、途上国を中心に世界で活躍する人や組織、新たな価値観を生み出すイノベーターの取材をする。